

一九二〇年代における施蛰存の文学社団活動をめぐって

——蘭社から水沫社まで——

徐 曉 紅

一九二三年、わたしは杭州の之江大学で学ぶ間、友人の戴望舒、張天翼らとこの小雑誌を作った。その時、まだ鴛鴦蝴蝶派文人であったため、たいそう旧文学めいたところがあった^(一)。

これは施蛰存（一九〇五～二〇〇三）が一九八八年六月に『蘭友』（第五期から第十七期）を上海図書館に寄贈する際、収納ケース用に書いた記念の文章冒頭の一節である。『蘭友』とは六〇余年前に施が文学青年たちと刊行していた旬刊誌で、一九八七年に張偉によって徐家匯蔵書楼で発見された。この発見に施は驚喜し、欠本の四期分は「この世のどこかにまだ残っているのだろうか」と嘆いた。施蛰存が初期のペンネーム「施青萍」を用いていた時期の同人誌を前にして、当時の自分は「鴛鴦蝴蝶派文人であった」と認めていることは興味深い。

それから約十年後の一九九七年十一月に朱健国のインタビュに応じたときも、施蛰存は「中学の時には鴛鴦蝴蝶派のリーダーであった^(二)」と語っており、これらの回想などからも施蛰存と鴛鴦蝴蝶派

（以下、「鴛派」と略す）との深い関係が窺えよう。さらに、鴛派として文学活動を開始したのは「ほかの一部の人たちは私より遅かった^(三)」とも述べており、自分の鴛派としての活動が先行していたことを強調していることも印象的である。

一方、三〇年代の施蛰存は、鴛派と一線を画する姿勢を取っていた。一九三三年の上海で左翼作家聯盟の活動運営資金を募集するにあたって、魯迅ら文壇の第一線で活躍する作家たちが『創作的經驗』（天馬書店出版）を執筆した際に、施も「我的創作生活之歷程」を寄稿して、「今でも大勢の人たちが私はかつて鴛鴦蝴蝶派文人であったと非難し、それは私の不名誉だと思っている^(四)」と記している。この言葉の口調は、八〇年代に自ら鴛派との緊密な関係を認めた文章とは対照的である。

施蛰存が鴛派と自らの関係をめぐり、時期によって異なる発言を行ったのは、作家としての彼自身の成長や、文芸界、政治状況の変化などによるのであろう。五四時期の文学地図における施蛰存の

位置づけを行うためには、『蘭友』の発刊・編集などの資料を発掘・整理して、彼の初期文学活動を考察する必要があるだろう。小論では筆者が新しく蒐集した一次資料を中心に、施蛰存が鴛派において強力なリーダーシップを発揮した後、新文学派へと「転進」し、さらに水沫社など新興社团活動へと移行していく過程を鳥瞰したい。また、施蛰存がどのような文学論あるいは文学的立場を標榜していたのか、当時のメディア、出版制度の中で、どのような作品をどのように発表していたのかも検討したい。すなわち小論は文芸誌の編集、出版を主な活動の基盤とした施蛰存とその仲間との社团活動の変遷を、彼の外国文学の紹介・翻訳活動の変移などを視野に入れつつ実証的に描きそうとするものである。

一 蘭社時期

「郷関」杭州での鴛派新鋭としてのデビュー

五四新文化運動期の『新青年』、『新潮』などの新文学刊行物は次第に新興知識階級、学生などの支持を得て活性化し、一九二一年に編集方針を新文学派へと大転換した『小説月報』も数回にわたり増刷された。これらいわゆる五四新文学派メディアは更に多くの読者を獲得し、文壇での権威的地位を確固ものにするために、文学の娯楽性、通俗性を否定するイデオロギーを貫き、市民の間で大流行する文学に一律「鴛鴦蝴蝶派」という蔑称を与えたが、読者数においては鴛派に対し相変わらず劣勢にあった。

新文学派が現れる前から、上海では『遊戯世界』、『禮拜六』、『小説月報』など、文芸誌の発行が盛んであった。このような近代メデ

ィアが職業作家の誕生を促したと言える。次節では施蛰存が最初に活躍した江南地域の文学結社について検討したい。

1. 鴛派の文学結社

一九二〇年代初頭の中国では、文学社团、小型の文学刊行物が「ナイル川の氾濫」のように登場している。霞光社と名乗る社团から『霞光』と名付けられた旬刊誌が発行されているが、実は同名の社团及び旬刊誌は少なくとも四種以上が数えられ、異なる発行人によって蘇州、杭州、常州、上海などで発行されている。筆者の調べによると、一九二三年前後に上海、蘇州、杭州等の江南地方で結成された文芸社团の数は少なくとも百社以上にのぼる。そのなかで最もよく知られている鴛派の社团は一九二二年七夕に蘇州で結成された星社と、ほぼ同時期に上海で結成された青社であり、各社团は「雅集」と称される会合を通じて文芸について討論するなど交流を深めている。

青社の同人週刊誌の『長青』全五期からは、当時の同人文芸誌のあり方がよく理解できる。同誌は青社のメンバーたちが食事会の最中に発行計画を相談し、二二年九月三日に創刊したものである。発刊所は、メンバー包天笑の上海の住所、愛爾近路慶祥里一百五十九號半である。『長青』の創刊号に塵父の「告青社社員」を掲げて、『長青』は我らメンバー全員の心血の花である」と称し、読者の要望に応じ「難解な欧化文法を使用しない」こと、新文学派の糾弾に対し、「屁理屈の非難をしない」ことを表明しており、青社同人は鴛派週刊誌『禮拜六』の趣旨に賛同しながら、『長青』を読者の良きパートナーたらしめんことを目指していたようである。『長

『青』に掲載された煙橋「小説的効率」、寄塵「給鄭振鐸的信」、碧梧「評海上現有之小説雜誌」などには鴛派の文学観が端的に現れており、新文学派の批判に対し寛容な姿勢を示しながら、共に中国文学の発展に尽くしたいという願望を述べている。二十一年十一月には、『長青』の後継誌『最小』が刊行されており、鴛派作家及び彼らと提携した若手作者たちの創作や、文芸批評などを多数掲載した。

当時、蘇州、杭州は江南では上海に次ぐ重要な文学活動の中心地であった。星社の若手メンバー、黄軫陶は蘇州で元社を発起し、『虎林』、『癸亥』などの旬刊誌を発行している。徐碧波は蘇州で波光社を発起し、『波光』を発行している。一方、杭州には戴望舒、施蟄存らが結成した蘭社があり、『蘭友』、『芳蘭』を発行している。鍾韻玉も杭州で緑社を発起し、『緑玉』、『緑痕』を発行している。後に、蘇州、杭州で結成された社団はそれぞれ「蘇党」、「杭党」と名乗っており、お互いに対抗しながら、議論を交わした。施蟄存、徐碧波、黄軫陶らが同時に数種の同人誌の執筆者を担当していることから、同人誌の発行の盛行ぶりがうかがえる。

2. 『礼拝六』への投稿経路

施蟄存ら一九〇五年科挙廃止前後に生まれた青年たちは、一九二一年頃に小説の試作を始め、上海文壇でのデビューを目指す一方、自前の文学結社の結成を模索していた。彼らは幼少期に私塾に通った経験があるため、中国古典文学の素養も豊かで、士大夫の審美観・趣向に馴染んでいる。その一方で新時代の文芸思潮や西洋の新事物に対し旺盛な興味を抱き、『礼拝六』、『長青』などを愛読し、『新青年』、『新潮』など新文学派の雑誌も読みあさっていた。李涵秋

(一八七四—一九二三)らの鴛派作家と比べると一回り以上も年下であるため、より多様で柔軟な文学的趣向を持っていた。

施蟄存は一九二一年頃、江蘇省立第三中学在学当時から小説「廉価の麴包」、「恢復名譽之夢」、「老画師」などを創作し、これらの作品が『民国日報』副刊「覚悟」や、『礼拝六』など複数のメディアに掲載されたことは興味深い。彼は新文学派の「覚悟」と鴛派の『礼拝六』という各媒体の流派に合わせて、異なる創作スタイルを使い分けていたわけではなく、「覚悟」に掲載されなかったものを改めて『礼拝六』に投稿したに過ぎない。『礼拝六』は投稿者の年齢、出身を問わず、社会人、学生など素人作者の作品を多数掲載しており、文学青年にとつて文壇への「登竜門」的な存在でもあった。施は発表の場を求めて各誌に投稿したのである。

「覚悟」に掲載された「廉価の麴包」には社会批判的なニュアンスが含まれており、プロレタリア文学の前触れと評価することもできよう。『礼拝六』に掲載された「老画師」は美人画を排斥し、自らの芸術観を一生貫く老画師に賛美をおくり、俗流への批判を露わにしている。これらの作品の出来具合はほぼ同水準であり、ランク付けは難しい。むしろ各誌紙が同一作者の同一傾向の作品を採用したことは、各誌紙間の編集傾向と採用基準における共通性を示すものと言えよう。この点を考えると、新文学派、鴛派両者の間に明確な境界線を引くことは容易ではあるまい。

「施青萍」署名の旧体詩、文言小説、エッセー、欧化小説、翻訳などの作品は多数に上り、多くの好評を得ている。^(四)鴛派の周辺で活躍する若手作者たちが結社の卡党を結成した際に、施蟄存を「主席」に推挙したことは、施蟄存自らが回想するように彼が「鴛派のリー

ダー」であったからと言えよう。

『礼拝六』、『半月』が読者の投稿を鴛派の既成作家と差別なく掲載していたことは、文学青年にとって魅力的であったろう。例えば、黄厚生は『小説月報』への投稿作品が文学研究会の会員作家と別格に扱われ、「読者文壇」欄に掲載されたことに対し、不満を述べている。彼はその「読者文壇」というコラムの設置が「読者は皆卑劣下層の作品であることを示す」もの、すなわち読者に対する一種の差別であると理解して『小説月報』への投稿をやめ、『良辰』など鴛派刊行物に投稿するようになったというのである。恐らく施塾存らの同世代の若手作者たちも、新文学派雑誌に対し黄と同じ印象を抱いていたのではあるまいか。

3. 蘭社の文学活動

金理が二〇〇八年の著書『從蘭社到「現代」——以施塾存、戴望舒、杜衡及劉呐鷗為核心的社团研究』で、「蘭社はあまり影響力がない」と記したのに対し、呉福輝は二〇一〇年著書の『中国現代文学発展史』で、蘭社が「五四主要文学社団表」の文学地図の一角を占めていることを指摘し、蘭社の文学史的意義を重視した。本節では蘭社結成の過程を当時の各種メディアによる報道などを参照しつつ考察したい。

一九二二年頃、宗文中学で学ぶ戴望舒は蘭社を立ち上げ、周辺の学校で学ぶ馬秋駢（馬鵬魂）、張無諍（張天翼）、葉為耽（葉秋原）、戴滌源（杜衡）、孫昆泉、李伊涼らの文学愛好者が同社の創設メンバーに加わった。この蘭社に同年秋に杭州の之江大学に入学した施塾存も間もなく加入し、文学に最も造詣が深い中心メンバーとなる。

戴望舒、施塾存は二三年元旦同人誌『蘭友』を杭州清吟巷七号で創刊し、同誌には他の社団同人誌の広告も掲載し、作品を交換掲載するなど江南各地の文芸社団と交流を深め、緊密な江南地域間の文学活動ネットワークを作り上げていったため、その名声は遠くまで響きわたるようになった。例えば、『世界小報』第一四六号（一九二三年七月十二日）では謝鄂常が、「蘭友。蘭友旬刊。小説を主体とする。編集者はすべて小説界で活躍中の者である。彼らの作品はすでに上海で一世を風靡していた。同誌の編集方法と内容は全浙江のトップと言えよう」と称賛している。また、杭州緑社の同人誌『緑痕』では、阿猫（鐘韻玉）の「談談杭州的小報」が、「蘭友が小報の中の覇者であることは皆さんに知られている。蘭社メンバーの心血の結晶物であり、その中いくつの作品はとて有名である」と記している。

施塾存は蘭社で活躍しながら『婦女旬刊』（杭州・張儷娟—発刊地・編集者、筆者注）、『虎林』、『癸亥』（蘇州・黄軫陶）、『波光』（蘇州・徐碧波）、『微光』（上海・姚賡夔）、『筆鐸』（蘇州・金君珏）などの文芸誌の執筆者も兼ねていた。しかも、彼は自分の著作『紅禅集』、『中国小説史』及び蘭社同人の著作『心弦』、『花霧』など十数点を「蘭社叢書」として上海大東書局から出版するという企画も立てている。

『蘭友』が第十七期まで発行されてから、二三年八月十二日に後続誌『芳蘭』が創刊された。当時、同人誌発刊ブームの中で、頻繁に誌名が変更されているが、それは宣伝戦略として練られたものであろう。恐らく蘭社も同人誌の多様性を重視し、さらに新鮮味を帯びた『芳蘭』を企画したのであろう。『芳蘭』は同人の作風の色彩

を一層強調するため、メンバーの名前を冠した特集號を打ち出した。ちなみに、第一期は「施青萍」（施蛰存の筆名）特集号である。

一九二三年九月上旬頃、施蛰存、戴望舒らは杭州を離れたため、蘭社での文学活動を停止した。蘭社の運営は戴望舒の親戚戴蝶園が一時的に引き継ぎ、後に馬鵬魂に編集部の幹事を委任したという。

施蛰存が発起人である維娜絲（ヴィーナス、美と愛の女神）文学会の活動も特筆すべきである。『蘭友』第十一期（一九二三年五月一日）の署名「蘭」の「文壇消息」は維娜絲文学会の紹介を掲載した。「維娜絲文学会簡章」は同会の「三つの趣旨」——新旧の意見を打破し、会員の内面的な情感に応じて創作し、中国新文学を確立すること、中国の旧文学を整理すること、世界文学を研究し紹介することを趣旨——を打ち出した。この宗旨は一見、文学研究会の趣旨と大差がないと思われるが、趣旨の一つでの新文学の確立について、「新旧の意見を打破する」ことを前提として、より詳しい問題意識を取り上げている点は興味深い。また、「簡章」の末尾に加えられた、「青萍は新文学・旧文学ともに研究と心得がある」という一文からは、新旧文学の共生という施蛰存の願望が浮かび上がってくる。維娜絲文学会では施蛰存が明確に自らの文学観を打ち出しており、それは後に発表される「新旧我無成見」にも通じていた。彼は蘭社メンバーに止まらず、より広範囲から会員を募集したが、結局目標とした百名以上の会員は集められなかった。それでも維娜絲文学会第一冊目の叢書『江干集』を一九二三年八月に松江の明星出版社から発行したことで、施の理想の一部が実現されたと言えよう。

『江干集』に対しては、朱智先が『最小』で、徐碧波、金君珏、黄転陶らが『世界小報』でそれぞれ称賛の言葉を贈っている。また

『世界小報』でも編集者姚民哀らが施蛰存の文才と人物への高い評価を語り、「畏盧（林紓―筆者注）の精微な要所をすでに捕えているのは私が最も評価する点であり、強引に新旧の境界を分けようとするだけでなく、両者に従いながら調整する」という好意的な文章を残している。それは施が『江干集』「創作餘墨」で「私も旧派作家の一員にはなりたくないし、新派作家の一員になりたいとは思わない。新旧を調和する者にもなりたくない。私はただ自分の地位に立ち、私の意志に合致する筆を操り、私自身の小説を書いているだけである」と、新旧文学の間の垣根を取り払い、新旧文学を超越しようとする姿勢とオリジナルな文学を作るという抱負と呼応している。この発言に対し、旬刊誌『微光』には「著作界の人たちみながこの言葉を繰り返し唱えるべきだ」という賛同が寄せられている。ここに述べたように、「新旧我無成見」は施蛰存初期文学の重要な文学観であり、後期文学創作においても貫かれていく。以上のように、施蛰存は蘭社の同人たちと同じ文学環境を共有し、大体同じ文学活動のコースを辿っている。しかし、彼の第一作を掲載した媒体や、文壇での彼の位置などを見ると、ほかの同人とは異なる様相が含まれていることが分かる。彼は中学時代からすでに作家を目指していたが、近代中国文学の黎明期にあつて、一体どのような作家を目指すかという具体的な作家人生についての展望は持っていなかったのである。「廉価的麪包」を掲載したのは「覚悟」であることから、彼にとつて、どのような流派の刊行物に第一作が掲載されるかはそれほど問題ではなく、むしろ掲載自体が作家志望の彼に対する励みとなったのであろう。後に、『文学旬刊』、『文学週報』などの新文学派刊行物にエッセー、書評などを掲載しながら、

『半月』、『世界小報』へ作品を送り続けていることから、施蟄存自身は新旧文学の間に境界線を引いていなかったことが理解できる。

ほかの蘭社のメンバー黄軫陶は十三、四歳の時から『玉梨魂』、『雪鴻泪史』を読み感動し徐枕亜に憧れ、彼と文通を始めて、後に上海で『小日報』などの編集に携わった。徐碧波は朱鴛雛を最も崇拜し、彼の文言小説を愛読し模作したこともあり、後に、上海で『明鏡』、『大衆月刊』などの鴛派刊行物の執筆者、編集者となる。同じ蘇州出身の金君珏は鴛鳴社を結成し、高雅な文辞に溢れる『鴛鳴』を発刊したことがある。彼らは施蟄存と同じ文学環境を共有しながらも、鴛派にのみ憧れ、施の掲げていた「新旧の意見を打破する」という見識を抱くこともなく、新文学を受け入れるだけの度量がなかった。こうして彼らは三〇年代後半まで鴛派周辺で活動し続け、同派予備軍から海派の主要作家へと進んでいったのである。

二 上海を拠点とする新たな結社活動及び翻訳の才能の開花

1. 青鳳文学会―上海大学時期の文学結社

一九二三年秋、之江大学を退学した施蟄存は、学術的な素養を深めるため、宗文中学を卒業した戴望舒と共に文学専攻が設置されている上海大学に入学した。それによって彼らの文学活動の舞台は杭州から上海に移ることになる。上海大学で施蟄存らは「青鳳文学会」の結成に踏み切った。二三年十二月七日『民国日報』副刊「覚悟」の「文芸界消息」欄の記事「上海大学底両個文芸団体」の中に青鳳

文学会の紹介が掲載されている。その内容は以下の通りである。

我々はとても愉快に自由に結集し、協力して我々の愛する文学を研究しており、現在、我々はまるで鳳凰のように香木の中で燃えていると感じている。我々は将来の美麗と不滅を望むため、青鳳を我々が集団の名前とする。

我々には一定の組織もなく、規則もなく、何の宣言もない。ただ我々は愉快に我々が同志に告げるのみだ。『我々が青鳳文学会は本日をもって成立した』⁽³⁰⁾と。

また、『小説月報』（第十五卷第一号、一九二四年一月）の「国内文壇消息」も「青鳳文学会」の紹介や、『青鳳』季刊、同会叢書の出版予告を掲載している。さらに、一九二四年一月五日、『民国日報』副刊「平民」第一八七期に掲載された施蟄存の「波斯詩人 Kāshī Gilāni 的散文詩」の下に、ハリール・ジブラーン⁽³¹⁾の作品集『先駆』、『瘋人』が近々青鳳文学会より訳出されると記されている。しかし実際には、青鳳文学会は維娜絲文学会と同じ運命を辿り、具体的な活動を展開せずに終わってしまった。それでも上海大学史に関する書籍は、学生の社団として「青鳳文学会」を取り上げて簡単な紹介を載せており、同会の短い成立宣言も重要な資料として見なしている。

青鳳文学会は湖波社（上記の「覚悟」の記事で青鳳文学会と一緒に紹介される上海大学の文学結社）と並び称された社団で、同時代の社団の中で時世に合わせた新文学的な革新性を持つ一方で、依然として鴛派との交遊があり、伝統的審美感の範囲を脱していない新旧二重の性格を持っていることがうかがえる。一九二三年秋に上海大学に入学した頃、施、戴両人は蘇州の星社が小倉別荘で開いた

第十回雅集を訪ね、『江干集』を星社のメンバーに贈呈した^(三三)。また、一九二五年五月に「施青萍」署名の作品が鴛派の雑誌『半月』に掲載されたこと、徐碧波と大同大学付近の半淞園に遊園したこと、黄転陶、金君珏らとの往復書簡のやりとりなども、施が新旧二つの世界を往来していたことの一つの証左となるだろう。

施蟄存の年譜資料によると、彼が『創造週報』に「残花」を含む二本の短篇小説を投稿したところ、『創造週報』第四十六期に郭沫若の施蟄存手宛ての公開書簡^(三四)が掲載され、これが彼にとって励みとなった。しかし諸事情によって、投稿作の創造社刊行物では掲載は実現せず、このことが施蟄存に与えたショックは恐らく大きかったであろう。投稿先刊行物の不安定な出版状況などの要因によって作品が順調に発表できなかった経験により、やはり自分で文芸誌を発行しなければならぬという意識が強まったのだと考えられる。その後も文芸誌発刊頓挫の経験を味わうことになる施蟄存らにとって、巨大な資金を提供してくれる劉炳鷗との数年後の出会いが、本格的な出版事業の幕開けとなるのであった。

2. 瓔珞社——外国文学試訳及び小説創作

施蟄存は上海大学でクラスリーダーとなり、「上海大学的精神」を『民国日報』副刊「覚悟」に投稿したが、やがて半年後、「この学校での勉強はよくないことがわかった」^(三五)ため、上海大学を退学した。その後、施蟄存は再び大同大学、震旦大学に再入学し、英語、フランス語の勉強に専念し、戴望舒、杜衡らと共に「瓔珞社」を結成し、一九二六年三月十六日旬刊誌『瓔珞』(瓔珞社の通信処は臨時的に施蟄存の松江の実家に設置された)を発刊した。「瓔珞」は

「微小貴重の意味から採ったものである(瓔珞は元々古代の珠玉でこれを連ねて貴重なる首飾りとする)」^(三六)。

『瓔珞』には施蟄存と戴望舒、杜衡の散文、詩、翻訳作品及び施蟄存の小説がそれぞれ各自複数の異なる筆名で掲載されている。その中で最も注目すべきは、戴望舒と杜衡がフランス留学経験を持つ東南大学の著名教授李思純、傅東華の翻訳に対し、誤訳を逐一指摘した文章である。彼らはここで自らの文芸集団が新文学派に劣らない外国語のレベルと、文学鑑賞力を持つことを宣告したとも言える^(三七)。

『瓔珞』に発表された施蟄存の「周夫人」はフロイトの心理分析的な手法の触発を受けた作品と見なされている。『広州民国日報』には一九二三年九月八日から「秋水」訳の田山花袋「蒲団」が連載されており、同時期の同紙掲載の署名「青萍」の筆記が施蟄存の『半月』に発表した「紅禪記漫行」の抜粋であるため、施蟄存が『蒲団』中国語訳を手にとって読んだ可能性も考えられる。ちなみに、『東方雑誌』一九二六年一月十日号にも夏丏尊訳『蒲団』が掲載されており、これまで夏訳『蒲団』が施蟄存に示唆を与えたと論じられていたが、『蒲団』初訳は二年繰り上がる。したがって、施蟄存「周夫人」は日本の自然主義的な手法を応用してもいると筆者は考える。

以上のように、施蟄存は初期文学活動を通じて戴望舒、杜衡と強い絆を結び、それぞれ異なる文学的関心を抱きながらも、外国文学の翻訳や、詩、小説の創作などを精力的に行っていく。その後、施蟄存は本格的に「新路径」^(三八)を歩み始め、シュニッツラー、クヌート・ハムソンの心理小説を翻訳しながら、心理分析的手法を用いて続々と作品を生み出していくのである^(三九)。

三 水沫社時期——本格的な出版事業のスタート

一九二六年秋、施鵬存は震旦大学に学ぶ間に、戴望舒のクラスメートであった劉呐鷗と知り合い、文芸に対する深い興味を共有していたことをきっかけとして親交が始まった。劉呐鷗は天文台（徐家匯）付近の施、戴の住居を度々訪ね、彼らに日本語を教え、日本の新興文芸を紹介している。そのとき、文芸誌創刊が話題となり、劉呐鷗は『近代心』という刊名さえ考案したことがある。

一九二七年四・一二反共クーデターの後、劉呐鷗は日本に行き、施鵬存らは上海の大学での勉強を終え、松江の実家に滞在し、共に翻訳、創作活動を精力的に行った。戴望舒はフランス人作家シャトーブリアンの作品、杜衡はドイツ詩人ハイネの『ハルツ紀行』、施鵬存はアイルランド詩人イエイツの詩とシュニッツラーの『ベルタ・ガルラン夫人』などの翻訳に没頭していた。こうして松江を舞台とする「文学工場」の幕開けとなる。

二八年頃には、北京より南下してきた馮雪峰が新たに「文学工場」のメンバーに加わり、昇曙夢、森鶴外、石川啄木らの作品を施らに紹介するなど刺激的な文芸交流を行っている。ソ連文学に耽読する馮雪峰の影響によって、彼らは「新ロシア詩集」の出版を計画したこともある。後に『莽原』に做った月刊誌『文学工場』の発行計画を立て、第一期はすでに最終の製版段階に入ったが、発行元の光華書局側責任者の沈松泉が、内容が急進的過ぎると反対したため中止

された。二八年三月に杜衡の翻訳作品『タイス』（フランス作家アナートル・フランス作）を「水沫社イデ叢書」として開明書店から出版し、水沫社という社団名が初めて印字された。一方、再び日本から戻ってきた劉呐鷗は、二七年秋戴望舒との北京旅行の最中に北新書店を訪ね、書店の経営や、書籍の発行業務を興味津津に考察し、書店経営を考え始めていた。やがて上海に戻ると施鵬存らと共に文芸誌出版活動を本格的にスタートさせ、文芸書の販売業務に携わる「第一線書店」を北四川路西寶興路の辺りに設置した。二八年九月十日には半月刊誌『無軌列車』創刊号を発行し、「永遠に延期発行にしないことを保証できる」と誓言し、「あなたのこれらの多くの欲望を満たす最も精緻な小雑誌」（ここでの「あなた」は読者を指している―筆者注）を指すと宣伝している。同時に開業を記念して、劉呐鷗の日本文学翻訳書『色情文化』、杜衡の小説集『石榴花』、胡也頻の小説集『向何處去』等が、「第一線書店出版新書」として出版された。

「第一線」とは、「一等」「一流」の意味合いであるが、当局から革命的、急進的な赤化書籍と関わっていると疑われたため、やむを得ず、水沫社にちなんで「水沫書店」と改名し、『無軌列車』も第八号以て停刊せざるを得なかった。水沫書店は購買部を四馬路望平街西に、雑誌部、批発部、出版部、編輯部を共に日本人街の北四川路海寧路の公益坊Y第一七三四号（現在の横浜橋付近）にある二階建ての「石庫門」の貸家に設置し、初めて正式に出版社として経営を始めた。水沫書店から最初に出版したのは「今日文庫」、「水沫叢書」の同人シリーズ著書である。また、一九二九年九月十五日、水沫社は「唯一の中国現代文芸月刊」と標榜する『新文芸』を創刊

した。『新文芸』は『無軌列車』や、かつての『蘭友』と同じく、同人作品や、他社の文芸誌の広告も掲載しており、クヌート・ハムスン等の外国作家に関する紹介も多く、これらの点からも編集者としての施蛰存の当時の関心のあり様がうかがえる。

水沫社は「日本文壇の左翼作品盛行の影響を受け、左翼作家の本営となり、左翼分子はよく同書店の二階を借りて会議を開いた」と、劉呐鷗が知人に語っているように、馮雪峰を通じて魯迅、夏衍などの左翼作家の著訳書の水沫書店から出版している。そのほかに、『新興文学叢書』、『現代作家小集』、『マルクス主義文芸論叢』、『俄羅斯短篇傑作集』、『法蘭西短篇傑作集』などの図書を続々と出版し、上海の出版業界の重鎮となっていた。特に、同社が「科学的芸術論叢書」の出版計画を打ち出したことにより、大江書舗、光華書局などの出版社もマルクス理論関係の書物も出版し、一種のブームが呼び起こされた。^(五四)

一九三〇年四月十五日、左翼文芸に転じたばかりの『新文芸』は当局の弾圧により「廢刊号」を出版し、水沫書店自体も業務を中止せざるを得なかった。十月、水沫書店を東華書店と再び改名するものの、水沫社は衰退期に突入していく。書籍販売業務を一旦中止し、聯合書店の店舗を借りて水沫社の臨時店とし、元の購買部での営業を再開し、新書数十種の出版を計画したがやがて一九三二年上海事変後には、東華書店は完全に閉店することとなり、「将来中国唯一の一流の文芸書店を目指す」という水沫社同人の希望も「水沫」の二文字の通り、はかなく水泡に帰ってしまったのである。

その後の水沫社のメンバーはそれぞれ異なる道を歩み始めた。劉呐鷗は『無軌列車』時期から持ち始めた映画理論、映画製作への関

心をふくらませていき、その後数年間は中国映画界で活躍することになる。戴望舒は杭州の実家に戻り、フランス留学の準備を始める。杜衡は上海の家にこもって翻訳に専念した。施蛰存は引き続き松江の中学校で教鞭を執り、一九三二年に『現代』の編集者になるまで松江で静かに暮らすのであった。

水沫社に関する叙述には、施蛰存の「我們経営過三個書店」^(五五)及び先行研究に負うところが大きい。以下ではこれまであまり言及されていない施蛰存の文学活動を見てみよう。施は蘭社時期における叢書編集の経験を下敷きとして、水沫社で敏腕のジャーナリストとして活躍し、水沫社同人及び外国文学の叢書数種の出版も計画した。

さらに『無軌列車』、『新文芸』の編集や出版関係の業務に携ったことで、後に大型雑誌『現代』の編集者として活躍するための経験をも蓄積した。維娜絲文学会、青鳳文学会、瓔珞社の時期に示した外国文学の系統的な紹介や翻訳への意欲は、水沫社時期に実現できた。また、「現代派文学の始祖」^(五九)と言われるハムスンに深い関心を示し、『新文芸』に日本の北欧文学研究者宮原晃一郎のハムスン論を掲載し、章鉄民訳のハムスンの代表作『餓』も出版し、自らもハムスンの『恋愛三昧』(原題『Paul』)を翻訳した。加えて、一九二七年頃にシュニツラーへの関心を持ち始め、数種の翻訳を行うなど、すなわち人間の内面心理への関心を深めていく。これは水沫社での編集、出版活動から見られる施蛰存文学の特色の一つである。

これまで水沫社での施蛰存の出版活動に関しては、マルクス関係の叢書及び魯迅の訳書の出版に重きを置かれることが多く、彼の創作集『上元灯』の出版の意義は見過ごされている。『上元灯』は施が自家版『江干集』刊行後、初めて上海で創作し出版した作品集で

あり、文壇での名声の確立とは緊密な関係を持つている。『上元灯』には文壇の第一線で活躍する葉聖陶、朱湘、沈從文、王哲甫、邵洵美、沈善堅らが称賛の文章を贈っている。また『上元灯』の好評は水沫社のメンバー、同人誌の編集者としての活躍ぶりと無関係ではなさそうだ。この水沫社時期に彼は上海文壇で活躍する沈從文、徐霞村、葉靈鳳、章克標、邵洵美、朱維基、林徽音、郭建英らと親交を持ち始め、広範な人脈を築いたのである。

さらに、施蛰存の水沫社での出版活動には「新旧我無成見」という文学観が濃厚に現れていると言えよう。施、戴望舒らは馮雪峰の勧めで『新俄詩選』を翻訳する一方、ダウソンやフランスの古風な弾詞にも興味を示し、戴は『屋卡珊和尼各莱特』（『オオカツサンとニコレット』、『Aucassin et Nicolette』—十三世紀フランスの作者不明の歌物語）を翻訳したこともある。その一方で一九二九年七月に水沫書店から施蛰存校点による明の董若雨著の古典小説『西游補』を出版し、「書相国寺撰景甲」、「書相国寺撰景乙」、「李清照詞的標点」など士大夫的な詩趣が溢れるエッセイも書いている。更に戴の『屋卡珊和尼各莱特』に寄せた序文「中世紀的行吟詩人」では、これらのフランスの古代弾詞を中国の「伝奇文学」と比較しながら吟味してはいるが、と読者に勧めてもいる。王文彬は戴望舒について「新旧混淆する複雑で多元的な文化思想が基調を成している」と批評しているが、戴との親密な関係にあつた施蛰存には多かれ少なかれこの戴と似た感受性が見受けられる。水沫社時期でも施蛰存は「新旧我無成見」の文学観を一貫して保持していたのである。もう一つ注目すべきは、ハムスン、シュニツラーの心理小説を翻訳し、自らも心理分析的な小説作品群を発表していることである。施に関して

はフロイトの心理分析理論やシュニツラー小説の受容と影響がこれまで重視されてきたが、その心理小説の源流を遡ってみれば、シュニツラーの師匠に当たるハムスンの存在が無視できなくなるだろう。シュニツラーの影響を受けると同時に、間接的にハムスンの文学からも触発されたと思われる。従って、施蛰存にとつてハムスン文学が一つの通過点となつたと捉えてもよいだろう。その具体的な検討は別稿に譲りたい。

四 終わりに

『最小』第一百七号掲載の「中国文芸協会成立会記」（記者、一九二三年十月二十三日）によると、上海大世界の寿石山房で鴛派作家の包天笑、周瘦鵬、胡寄塵、徐卓呆ら三十九人が参加して、「中国文芸協会」の成立大会が開かれ、袁寒雲が主席に選出されている。この大会で採択された中国文芸協会「簡章」は協会の宗旨を「文芸を研究し、道徳を磨き、互助の精神に基づき文化の発展を求めると定めている。また、同協会主要メンバーより一回り下の世代の施蛰存ら「後進作者」は、鴛派と新文学派が発起した組織を参照しながら維娜絲文学会を発起して文壇へのデビューを果たした。さらに同会の胡寄塵、施蛰存、朱維基、黄厚生らは新文学派、鴛派双方の刊行物に投稿し、両派の作家たちと交友関係を深めたが、やがて一派の文学にアンビバレントな感情を持ち、別の一派の道を歩んでいった。同時代性という視点に立てば、鴛派、新文学派の両者は対立する一方で、共通の問題意識を抱え、作品の文学性においても相違点と同時に共通点も指摘できよう。これについては別稿で論じたい。

蘭社での活動から之江大学在学中の小説集『江干集』出版及び維
 娜絲文学会の発起に至る施蟄存の精力的な活動ぶりから、「杭州」
 が確かに彼にとって文学的出生の地であったことが理解できよう。

「浮生雜詠八〇首」収録の「郷閩慚愧說杭州」（故郷は恥ずかしな
 がら杭州と言う）の一句中の「郷閩」とは、施蟄存にとって、単な
 る生地を指すのではなく、彼の文学的「郷閩」、いわゆる発祥点、
 起点をも意味しているのであろう。また蘭社での精力的な文学活動
 によって、施は上海の鴛鴦作家に文学者としての実力が大いに認め
 られ、文学青年としての自信を得た後、次のステップを目指して、
 活躍の舞台を上海に移したのだ。

施蟄存は初期の試作期においてチェホフ、モーパッサンなどの外
 国作家が描く小人物の悲惨な運命に注目し、松江の文学工場時期に
 はソ連文学に興味を示している。^(六三)その後、ハムスン、シュニッツ
 ラーの心理分析小説などの翻訳・受容・模倣を体験し、小説集『小
 珍集』（一九三六）を上梓した。このような施蟄存の外国文学体験
 は、維娜絲文学会で自ら掲げた宗旨の「外国文学の紹介」の実践で
 あったとも言えよう。また、施蟄存は三〇年代の「文芸大衆化」に
 際しては、伝統的な話本、演義、伝奇の叙述スタイルを見直した上
 で、創作に再びそれらの手法を取入れながら、最大限に欧化文法を
 排除し、筆記風の小説「獵虎記」と、唐伝奇風の小説「黃心大師」
 の創作を試みた。このような試みも維娜絲文学会で打ち出した「新
 旧文学ともに通じる」という目標の実践でもあり、「新旧我無成見」
 という彼の文学的立場の一展開とも考えられよう。

以上、文学社団としての蘭社、青鳳社、瓔珞社における施蟄存の
 活動を考察してきたが、彼の鴛鴦派から新文学派への移行とは、「旧」

文学から「新」文学への突然の転進ではなく、持続的有機的な文芸
 活動の発展であったと言えよう。彼は「新文学への転進」について
 繰り返し述べているが、その転進時期及び文学創作の起点に関する
 説明には度々微妙なズレが生じていることは興味深い。^(六四)これまで『小
 説月報』での「娟子」の発表と、葉聖陶らの新文学派作家との交遊
 が、施の新文学への転進の証左とされてきたが、実は転進後の作品
 を初期の試作と比べて読むと、質的な断絶よりも連続性の方が濃厚
 である。^(六五)施蟄存は、清末以来の旧文学及び五四新文学を吸収し、三
 〇年代という民国期文学黄金時代において本格的な文学活動を開花
 させたのであった。

注

- (一) 原文：一九二三年，我在杭州之江大学肄業，與友人戴望舒、張天翼
 等辦此小刊物，其時尚屬於鴛鴦蝴蝶派文人，故頗有旧文学気味。
- (二) 原文：不知天壤間尚有存者否？
- (三) 朱健国「施蟄存的第五扇窓戸」、『文学自由談』第九十八期、二〇〇
 四年五月。原文：我在中学就是鴛鴦蝴蝶派的領導人。
- (四) 原文：一些人他們還比我遲。同注三。
- (五) 施蟄存『燈下集』（開明書店、一九九四、五十八頁）を参照。原文：
 到現在許多人罵我曾經是鴛鴦蝴蝶派文人，以為這是我的不名誉處。
- (六) 施蟄存らの社団活動に関する先行研究には多数挙げられる。例えば、
 楊之華『文壇史料』（大連書店、一九四四）、金理『從蘭社到「現代」
 ——以施蟄存、戴望舒、杜衡及劉呐鷗為核心的社団研究』（上海書店出版
 社、二〇〇八）のほか、施建偉『中国現代文学流派論』（人民出版社、
 一九八六）、賈植芳等編『中国現代社団研究』（江蘇教育出版社、一九

八九)、趙凌河『中国現代社団論』(遼寧人民出版社、一九九〇)などがある。小論では、これらの先行研究のなかであり言及されなかった施蛰存の二〇年代初期における維娜絲文学会、青鳳文学会からの活動を視野に入れ、彼の文学観が如何に後期の社団活動において展開していったかを検討したい。

(七) 子敵「悪趣味的毒害」、『晨报副鵠』一九二二年十月二日を参照。

(八) 西諦「消閑?」、『文学旬刊』一九二二年七月三十日、西諦「悲観」、『文学旬刊』一九二二年五月一日、『小説月報』一九二二年八月(第三卷第八期)「通信」欄に読者王桂榮の投書などを参照。

(九) 王建輝『出版與近代文明』(河南大学出版社、二〇〇六)一七六―一八三頁。

(一〇) 茅盾編『中国新文学大系一九一七―一九二七小説一集』「導論」を参照。原文…各地文学社団活動和小型刊物的出版、就好比是尼羅河の大氾濫。

(一一) 「雅集」とは文人雅士の集まりである。「雅集」の由来は中国文化史上有名な「西園雅集」(北宋)から来ている。「西園雅集」以来、士大夫階級では作詩、作賦、詩鐘、クイズショーや遊園、唱酬を行う重要な文化活動としての「雅集」が定着した。王喜明「雅集漫話」、『書屋』(書屋雜誌社、二〇一〇)第九期、四十六―四十八頁を参照。南社第一回目の「雅集」は蘇州の虎丘で行われている。

(一二) 范伯群『中国現代通俗文学史』(北京大学出版社、二〇〇八)などでは『長青』が全国の図書館に蔵されておらず、恐らく世の中にもう残されていないだろう、と記している。筆者は幸運にも二〇一〇年春に上海図書館で『長青』を発見するに至り、それに関する紹介資料を「閑載。『長青』」と題し、『新文学史料』第四期(二〇一一年十二月)に掲載。

(一三) 原文…長青也。我全体社員心血之花也。

(一四) 例えば『半月』は「紅禪記漫記」を「ずばぬけている作品」として評価している。『虎林』の編集者黄軫陶は「青萍談吐」を「小説創作についての議論は極めて説得力があり、小説を作る人にとって助けになる」(原文…論作小説頗能中肯亦小説作者之一助也)と称賛し、また『婦女旬刊』の編集者は「新婦女之敵」を「論説が極めて透徹である。この方の小説の文章は素晴らしと言える」(原文…説来精透極了。此君の小説詞章。可算臻極)とたたえている。

(一五) 王受生「記卡党大会」、『最小』第二六八期、一九二五年四月十五日。

(一六) 「評改制後的小説月報」、『良辰』第二期、一九二二年五月二十一日。原文…表示読者都是卑下層的作品。

(一七) 「杭州的報屁股」(下)。原文…編者都是属小説界的健者。他們作品早已在海上風行。該報編法與内容。可称全浙之魁。

(一八) 第五期(一九二三年八月十六日)。原文…蘭友大家曉得是小報中之霸王。蘭社社員的心血結晶体。幾個著述。都是很有名。

(一九) 緑「文壇消息」、『緑痕』第三期、一九二三年七月二日、または『時報』一九二三年八月八日、署名「修甫」の記事を参照。

(二〇) 『蘭友』の停刊に関しては、ほかの一説がある。『緑痕』第二期(一九二三年七月十一日)の「文壇消息」によると、『蘭友』は第十八期から紙幅を増加し、小説やエッセーを多く掲載する。四十八行に変更するという。原文…蘭友第十八期起增加篇幅。多登小説及雜論。改為四十八行云。第十八期は未見。実際に発刊したかどうか、不明。

(二一) 「施青萍」特集号に「閩語」、「名人之情書」、「蘭閩月令」らの六篇が掲載している。『緑痕』第六期(一九二三年八月二十四日)、「文壇消息」を参照。

(二二) 『緑痕』(杭州岳王路第三号に位置する緑社の同人誌である。『蘭友』のスタイルを真似して『緑痕』を発行した)第七期、一九二三年九月五日を参照。

- (三) 原文…本会以破除新旧意見。順會員内心之情感。發為作品。以創設中国新文学為宗旨一。以整理中国旧文学為宗旨二。以研究及介紹世界文学為宗旨三。
- (四) 原文…青萍對於新文学旧文学。都有研究和心得。
- (五) 『最小』第九二号、一九二三年九月五日に掲載。詳細は拙稿「文壇デビュー期の施蟄存―『新旧我無成見』を中心に」(『野草』八十五號、二〇一〇年二月)を参照。
- (六) 「各作品はみな描写に極めて優れ、特に真摯な天性を描きだしている」(原文…篇篇都極描写之能事。而尤以描摹天性的真摯)、朱智先「評『江干集』、『最小』第九三号、一九二三年九月七日を参照。徐碧波が「浪漫談」(『世界小報』第二七一号、一九二三年十一月十三日)に、『江干集』を読んだ後、「まるで口にオリーブを入れたように、豊かな味わいがなかなか消えない」(原文…果覚如啖諫果、津津然味美於回)と称賛している。金君珏「読『江干集』後」(『世界小報』第三七七号、一九二四年三月七日)が同書のデザインを「そのデザインの精緻且つ優雅さは、十分人に美感を覚えさせる」(原文…至其式様之精雅、尤足令人發生美感)と称賛している。
- (七) 『世界小報』第二九二号(一九二三年十二月四日)を参照。原文…直已快得畏虛精微要竅、最為余所欽佩者、非但不強分新旧畛域、且從而調劑之。
- (八) 原文…我也不願立在旧派作家中。我更不希望立在新作家中。我也不願做一個調和新旧者。我只是立在我自己的地位。操着合我自己意志的筆。做我自己的小說。
- (九) 小説痴「説林片集」、『微光』第二期、一九二四年三月二日。原文…凡著作界中人皆常三復斯言。
- (一〇) 原文…我們很愉快很自由地集合了，互助着研究我們所愛的文学，現在我們覺得我們正如鳳鳥一樣地在香木中燃燒，我們希望将来的美麗和永生，所以我們便以青鳳作為我們的集合名字。／我們也沒有一定的組織；也沒有章程，也沒有什麼宣言。我們只是很愉快地報告我們的同志道…「我們的青鳳文学會從今天起成立了」。
- (一一) 上海市委党史資料征集委員會編集、王家貴ら著『上海大学―一九二二―一九二七』(上海社会科学院出版社、一九八六)及び『上海大学史料』(復旦大学出版社、一九八四)の中で青鳳文学會を取上げている。
- (一二) 青鳳文学會の「鳳」の鳥名や、蘭社に「蘭」の花の名の使用からも、施蟄存らの伝統的審美感が窺われる。五四新文学派の出版物が「新」の文字をよく用いたのとは対照的に、実際に「青鳳」、「蘭社」の名は星社、青社、紫羅蘭などの鴛鴦蝴蝶派の社団名、同人誌名と類似しており、青鳳社と鴛鴦蝴蝶派との文学的センス、趣向においての合致性がうかがえるだろう。また、青鳳文学會の趣旨に関して、『民国日報』副刊「覺悟」及び『小説月報』で紹介されているように、「お互いに助け合いながら、彼らの愛する文学を研究する」(原文…互助着研究他們所愛的文学)一文から彼らはあくまでも自らの趣味を重んずることを前提として文学を研究していたことがうかがえよう。そこからは社会改革など重大な歴史的使命を担うことは目指す新文学派との質的な相違が見られるであろう。
- (一三) 戴夢陽、施青萍「蘇州的二日」、『世界小報』第二二二号(一九二三年九月二六日)を参照。
- (一四) 「施先生、小説原稿はすでに拝見した。住所を教えてください。沫若」。
- (一五) 朱健国「施蟄存の第五扇窓戸」、『文学自由談』第九十八期、二〇〇四年五月。原文…看到了這個學校讀書不行。
- (一六) 沈子成「記水沫社」、『小説月報』(一九四〇年十月創刊、聯華廣告公司出版部發行)第四十一期、一九四四年五月十五日を参照。原文…系採微小珍貴之意(瓔珞本系古代珠玉連成之珍貴頭飾)。

- (三七)「安華」—施蛰存、「信芳」—戴望舒、「白冷」、「德疇」、「禹生」—杜衡。
- (三八)「青萍談吐」、「虎林」第五期(一九二三年五月二十六日)に掲載。署名施青萍。原文…惟所惜吾儕近来無紹介西洋文学者。且無一與小說月報性質相同之雜誌。故相形之下。似少拙耳。不則如新文学作家言。
- (三九)拙稿『広州民国日報』に新発見する施蛰存の作品について、『中国文艺研究会会報』第三五号(二〇一一年一月三〇日)を参照。
- (四〇)施蛰存「我的創作生活之歷程」、『灯下集』六十一頁を参照。原文…独自去走一条新的路徑。
- (四一)シュニツラーと施蛰存の比較研究について、斎藤敏康「施蛰存と>シュニツラー『婦心三部曲』と『霧』、『春陽』、『野草』第六六号(二〇〇〇)、及び張東書、陳慧忠「施蛰存與顯尼志勒」、『中国比較文学』第四期(一九八七)などの論文がある。
- (四二)『劉呐鷗全集—日記集(上)』(台南県文化局、二〇〇一)三月八日に、「施蛰存の新作の小説「紅衫」をまだ幼稚の領域を脱していない」(原文…看施君的短篇「紅衫」還不服出幼稚之域)と書いている。「紅衫」は、短篇小説「娟子」(『小説月報』第十九卷第一号(一九二八年一月)に掲載)の改題前のものである可能性が高い。「娟子」ではヒロイン娟子の「紅衫」(赤い毛糸のセーター)が重要なモチーフとして現れており、また登場人物である蕪村が燃やす性欲の象徴でもある。彼がこれを娟子の体から強引に剥ぎとって懷に抱き締めるシーンは、女弟子の体臭を残す「蒲団」に時雄が顔を埋め、匂いを嗅ぎながら泣くという田山花袋の『蒲団』の結末を連想させる。
- (四三)『劉呐鷗全集—日記集(上)』(台南県文化局、二〇〇一)の一月四日、十九日を参照。
- (四四)施蛰存「最後一個老朋友—馮雪峰」、『北山散文集(二)』二八六頁を参照。
- (四五)その後、光華書局は「水沫社」の文字が印字された「螢光叢書」を一九二九年四月から続々と出版するに至る。同叢書の中には、施蛰存が柳安の筆名で翻訳したイタリア作家ボツカッチョの『十日物語』(『デカメロン』)と、孫昆泉が翻訳したゴリーキーの『フォマ・ゴルデーエフ』が収められている。
- (四六)「水沫社イテ叢書」の「イテ」は施蛰存「懐開明書店」(『北山散文集(一)』、華東師範大学出版社、二〇〇一、三三二頁)によると、「独力で行い、行動を共にするものがないとの寓意である」。原文…寓独行無伴之意。「イテ叢書待刊書目」リストには、アラン・ポーの『黒猫』(施蛰存訳)、森鷗外の『杯』(馮雪峰訳)、シュニツラーの『ベルタ・ガラン夫人』(施蛰存訳)など七カ国の作品が挙げられている。
- (四七)一九二八年十一月二十九日、上海で開いた「新書業公会第二次籌備会」に第一線書店もその一員として参加した。『北新書局與中国現代文学』(上海三聯書店、二〇〇八年、二四三頁)を参照。
- (四八)『無軌列車』第一号、一九二八年九月十日。挿入広告を参照。原文…可以担保永不脱期。
- (四九)『無軌列車』第一号、一九二八年九月十日。挿入広告を参照。原文…満足你這許多欲求的最精緻的小刊物。
- (五〇)『色情文化』について詳しくは、藤井省三「台湾人『新感覺派』作家劉呐鷗における一九二七年の政治と『性事』——日本短篇小説集『色情文化』の中国語訳をめぐる」、『二〇〇七年台日國際學術交流國際會議論文集—殖民化與近代化—檢視日治時代的台湾』(亜東關係協會編、台北・外交部出版、二〇〇七、一二六〜一三九頁)を参照。
- (五一)沈子成「記水沫社」、『小説月報』第四十一期、一九四四年五月十五日。
- (五二)原文…惟一的中國現代文学月刊。
- (五三)随初(黃天佐)「我所認識的劉呐鷗先生」、『華文每日』第四十九号、

一九四〇年十一月一日。原文…当時の水沫書店は受了日本文壇左翼作品盛行的影響、成為左翼作家の大本營、左翼份子常假借該書店樓上開會。

(五四) 施蟄存「我們經營過三個書店」、《北山散文集(一)》(華東師範大學出版社、二〇〇一、三一六頁)を参照。

(五五) 「文芸短訊欄目」、《草野》第四卷第五号、一九三一年一月十六日。

(五六) 水沫來函「水沫書店の購買部の旧住所は營業開始し、新書數十種の出版を計画中であるという」、《草野》一九三一年一月三十日。原文…開飯水沫書店門市部旧址。開始營業。並計画中即將出版新書數十種云。

(五七) 水沫社同人「書業別訊—水沫書店來函摘刊」、《草野》一九三〇年十一月十日。

(五八) 『北山散文集(一)』三〇七頁を参照。

(五九) シンガー (Isaac Bashevis Singer) は「二〇世紀の現代派小説はハムスンから始まる」(“The whole modern school of fiction in the twentieth century stems from Hamsun. They were all Hamsun's disciples: Thomas Mann and Arthur Schnitzler . . . and even such American writers as Fitzgerald and emingway.”) と評している。何成洲『対話北歐經典——易卜生、斯特林堡與哈姆生』(北京大學出版社、二〇〇九、九九頁)を参照。

(六〇) 王文彬『雨巷中走出的詩人——戴望舒伝論』(商務印書館、二〇〇六、六二頁)を参照。

(六一) 原文…研究文芸砥礪道德本互助之精神謀文化之發展。

(六二) 謝魯渤「我眼中的杭州詩意」、《美文》二〇〇八年第一期を参照。

(六三) 施蟄存は一九二九年頃には「花」、「阿秀」らのプロ文学をも創作し、『新文芸』に発表した。

(六四) 例えば一九八三年発表の「羅洪、其人及其作品」(『北山散文集(一)』一〇三三頁)では、「私は一九二四年から新文学創作を始めた」と述べ、二〇〇一年刊行の『世紀老人的話—施蟄存卷』(遼寧教育出版社、四〇

頁)では、『瓔珞』創刊時(筆者注…一九二六年)には頃、私はすでに鴛鴦蝴蝶派文学から新文学の創作へと変化していた(原文…『瓔珞』創刊時、我已從鴛鴦蝴蝶派文学転変到投入新文学創作之中)と述べ、一九九六年刊行の『十年創作集』(華東師範大學出版社)「引言」では

「私は自分の創作人生を一九二六年から計算し始める。『上元灯』を一九二六年に執筆したからである」と記し、一九九六年刊行の『施蟄存文集』(一九九六)「序言」では「文学生活のスタートを一九二八年に定めている」と記している。多くの研究者は施蟄存が一九二八年から新文学の創作を始めたとして述べているが、恐らく「一九二八年」が四説の内の一説として重視されるのは、この年に施蟄存が短篇小説「娟子」を新文学派の機関誌『小説月報』(一九二八年一月)に初めて発表したからであろう。

(六五) 例えば、初期施蟄存小説で主要人物の系譜を構成する感傷的男性は、いわゆる「新文学へ転進」後の作品「娟子」などでも主人公となっている。詳細は拙稿「施蟄存の初期恋愛小説について」、『東方学』第一二二号(二〇一一年七月)を参照。

[附記] この論文は二〇〇九年十月十日の日中学生会第六十一回大会(於埼玉市・文教大学)における研究発表及び日中学生会若手シンポジウム応募論文を大幅に加筆修整したものである。資料の蒐集に際しては、東京大学文学部布施博士学術研究基金「若手研究者奨励費」の助成を受けた。ここに記し、感謝の意を表したい。

● 執筆者紹介(7)

高山 大毅(たかやま だいき)

・一九八一年生、東京大学大学院人文社会系研究科(東アジア思想文化) 博士課程単位取得退学

・日本学術振興会特別研究員(PD)

・「人情」理解と「断章取義」——徂徠学の文芸論——」(『国語

国文』第七八巻八号、二〇〇九年)。「説得は有効か——近世日

本思想の一潮流——」(『政治思想研究』第一〇号、二〇一〇年)。

・『滄溟先生尺牘』の時代——古文辞派と漢文書簡——」(『日

本漢文学研究』第六号、二〇一一年)。

● 小野 泰教(おの やすのり)

・一九八一年生、東京大学大学院人文社会系研究科東アジア思想文化専門分野博士課程単位取得退学

・東京大学大学院人文社会系研究科助教

・「咸豊期郭嵩燾の軍費対策——仁政、西洋との関連から見た——」(『中国——社会と文化』第二六号、二〇一一年七月)。「再

論湖南戊戌変法——湖南巡撫陳宝箴与時務学堂、南学会——」

(鄭大華ほか主編『戊戌変法与晚清思想文化転型』北京：社会科学文献出版社、二〇一〇年)。「郭嵩燾・劉錫鴻の士大夫観

とイギリス政治像」(『中国哲学研究』第二二二号、二〇〇七年七月)。